
ひぐらしのなく頃に 闇灯し編

黒狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に 闇灯し編

【Nコード】

N1367X

【作者名】

黒狐

【あらすじ】

何度も何度も繰り返される昭和58年6月。

そして繰り返される惨劇。

絶望に明け暮れていた梨花に一つの光が届く。

その光は梨花を助け出すことが出来るのか、それとも惨劇は繰り返し替えられてしまうのか？

難事件に一人の青年が立ち向かうっ!!!

後書きには第四話からひぐらしメンバーと作者の黒狐がおもしろお

かしくトークし合うラジオ番組『ひぐらしの彩るラジオ』

黒狐とひぐらしメンバーとみなさんがこのラジオに色を付けていく番組です。果たしてどんな番組になっていくのか？

第一話 一つの光

また・・・だめだったの・・・

昭和58年の6月から私は抜け出せない。何度も何度も挑んできたが、必ず最後に何者かに殺されてしまう。奇跡はなかなか起こってくれない。いろいろなかけらを作ってもなかなか奇跡は起こせない。たまに奇跡は起きるが全てがだめだった。神様はなかなかサイコロの6を出してくれない。

なぜなの。何がだめなの。何もすればいいの。

その問いに何も返ってこない。

誰も助けに来てくれはしない。

誰か・・・この声が届くなら・・・

私を助けてっ――

「・・・んっ」

目が覚めると、御神雄斗は布団の中にいた。窓からはまぶしい光が部屋に差し込んでいて、外からは小鳥の鳴き声が聞こえてきた。

・・・朝か。

俺は時間を確かめるために部屋に掛かっている時計を見た。

時計は7時を示していた。ちなみに今日は日曜日なので、俺が通っている中学校は休みだった。

もう一度寝てもいいがなんだか今日はそんな気がしなかった。

俺はベッドから出ることにした。

ウォオオオオオオオオオ――

一階に降りると母さんが掃除機でリビングの掃除をしていた。掃除機からは爆音が鳴り響いていた。

母さんと目が合った。

どうやら俺が起きたことに気づいたらしい。

すると鳴り響いていた爆音が止んだ。

「あら、もう起きたの」

「おはよう」

「それより昨日、ありがとね」

「別にいいよ。また何か事件があったらまた教えて」

「もうあんたの力を借りないわよ」

「その台詞何回目だっけ？」

「う、うるさいっ！」

母さんは警察官だ。周りからは御神警部と呼ばれている。ちなみに父さんは刑事だ。俺は母さんや父さんの依頼などで、殺人事件や誘拐事件なんかの推理をしている。俺は学校の成績はあまり自慢できるようなものではないが、事件を解決するようなことの知恵はみんなに自慢できる。

昔にある事件に巻き込まれたときに、俺がその事件を解決しだしてから、母さんに呼ばれるようになった。俺は迷惑なんて思っていない。不謹慎だが大歓迎だ。昔に難事件を解くために家がある東京から離れて一人暮らしをしたこともある。そのために中学校を転校していた。ちなみに2回転校している。長期休暇中は何回か家を離れたこともあった。

「何か難事件ってないの？」

「さあ？自分で調べてみたら」

「へいへい」

母さんは遠い所に行かなければならない事件は絶対教えてくれない。

俺が最初に遠出をした事件を教えたのは母さんだった。それから母さんは遠出をしないといけない事件はまったく教えてくれない。

何か後悔をしているのだろう。それとも寂しかったか。

俺はキッチンから食パンを一枚取り出しトースターにその食パンを入れた。

リビングで朝ご飯を取ると、俺は部屋に戻った。

雄斗はパソコンを起動させた。

パソコンでは、いろいろな事件がどこかで起きていることを調べている。ヒットはしないかもしれないが、とりあえず探している。するとこんな事件を発見した。

犬飼総理大臣の息子を誘拐！！

見出しにこんなことが書かれていた。

確かこんなことが前にニュースでやっていたな。

そう思い、雄斗は戻るボタンを押そうとした。

しかし、その手は止まってしまった。

でも何か戻ってはいけない気がしたのだ。だからその記事をじっくりと読むことにした。

すると一つの記事を発見した。

雛見沢ダムバラバラ殺人事件

「・・・・・・・・っ！」

こんなこと知らなかった。そのとき初めて知った。ニュースでも見たことがなかった。俺はそのニュースについての詳細も見た。

×月×日、××県鹿骨市の雛見沢ダム建設にてダム現場の監督が殺害されていた。

そのようなことが書かれていた。他にもそのような事件の関連記

事が書かれてあった。

それらの事件をまとめて雛見沢連続怪死事件というらしい。通称、オヤシロさまの祟り。

雄斗はかすかに笑みを浮かべてから、一階に駆け下りていった。

第一話 一つの光（後書き）

どうもっ！黒狐です。

ひぐらしのなく頃にの初作品『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に『』が一万アクセスを突破したので、ノリに乗って新たな作品を投稿してしまいましたっ！

『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に『』ももうすぐクライマックスを迎えるので、そちらの方もよろしく願います。

これからも応援よろしく願います。

感想待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいです！

第二話 転校初日・・・

そうして俺は雛見沢に引っ越してきた。中学校も転向した。親にも許可をもらった。全てばっちりだ。説得するのにとても大変だった。結構怒鳴られたことはもう忘れてしまおう。

話を戻すが、雛見沢にはコンビニやファミレス、自動販売機などが一つもない。隣の興宮市にそれらはあるが自転車で一時間もかかってしまう。不便なところだが山奥なので空気がとてもきれいだ。

今は雛見沢にある中学校の職員室に来ていた。そしてソファに座っている。

中学校といっても営林所の敷地を貸してもらっているらしい。しかも全学年合わせて一クラスしかないらしい。授業はテキストをやるだけだという。服装は何でもいいらしい。私服でも違う学校の制服でも。俺はとりあえず前の学校の制服である。学校がめんどくさいと思っている人にはもってこいだろう。学力がどうなるかわからないが・・・・・・。上級生は一人しかいないらしい。俺と同じで、引っ越してきたばかりの中学二年がいるらしい。男子の中では最上級生だ。まったく実感がなかった。でも俺の目的は雛見沢連続怪死事件の真相を暴くことなので、学校とかはどうでもいい。

ガラガラ――

職員室の引き戸が開いた。そこから担任の知恵先生が顔を出した。「御神君、もうすぐホームルームが始まるので、皆さんに自己紹介をしてください」

「はい」

俺は職員室を出た。

そうして俺は教室の引き戸の前に今いるのだが……
なぜ黒板消しが引き戸に挟まっている。

……いじめか？これは転校生への嫌がらせなのか？

そういう疑問が浮かんでいるが、とりあえず黒板消しをさつと抜き取った。そして教室の中に入った。

「東京から着ました。御神雄斗です。よろしくお願いします」
いつも通りの挨拶であった。

さっきの黒板消しの件はとりあえずスルーすることにした。

「では、空いているあの席に座ってください」

「はい」

その後ろのほうの席に座った。

「俺、前原圭一っていうんだ。よろしくな」

横の少年が声をかけてきた。

「よろしく」

横の席に座っている前原圭一という人に声をかけられた。

すべて今まで通りだった……黒板消し以外はっ！

漫画でしか見たこと無いぞっ！！！！

これから雄斗はさまざまなものに巻き込まれていくことになるのだった。

そしてなんやかんやで授業は始まった。授業といってもテキストをやるだけだが、下級生達は知恵先生が教えまわっている。上級生はほぼ自習のようなものだが。テキストの最初のほうは前の学校で習っていたので何とかできた。たまに手が止まっていたが、そういうことは気にしてはいけない。

そして、お昼の時間になった。この学校では好きなグループになって昼食をとっているようだ。俺は親しい奴なんていないので一人

だ。一人なんて慣れれば楽だ。な、慣れてる……。

そんな悲しいことを思いながら昼食を取り出そうとしていると前原圭一に声をかけられた。

「なあ、御神。一緒に食わないか？」

「ああ、別にいいけど」

そして椅子を持って近くに行こうとした。

「……………ん？」

なんと他の人も一緒だったのだ。

なんだ、他の人も一緒なのか……んっ？

そこには女子が4人いたのだ。下級生が二人と委員長である中学三年生の方が一人、同じ年のような方が一人。全員が机をくっ付けていた。

完全に戸惑っていた。

こんなのは初めてだ。

黒板消しからおかしなことが続いていくようだ。

「雄斗、早く机を持って来いよ」

「御神君も来なよ」

あたふたしていると委員長と前原圭一に声をかけられた。

「あ、ああ」

とりあえず俺は机を持ってそのグループに入った。その机では全員のお弁当が広げられていた。とりあえず前原君に聞いてみた。

「パンって持ってきたら……………まずかった？」

「いや、別にいいけど……………」

前原君も困っていた。

「じゃあ、明日から弁当もって来たらいいじゃん」

委員長が助けを出してくれた。

「はあ、明日から早く起きないといけないのか……」

「わかった。明日から持ってくる」

そのことを俺はしぶしぶ了解した。

「おじさんは園崎魅音。よろしく。じゃあ次っ！」

「えっ、うんーつと竜宮レナ。学年は同じだよ！よろしくね」

「みい、古手梨花なのですよろしくなのですよ。にぱー」

「わたくしは北条沙都子ですわ。トラップを避けるなんて圭一さん以上ですわね。まあ、よろしくおねがいしますですわ」

「さっきも言ったが、俺は前原圭一。よろしくな」

「一つだけ言ってもいいだろうか？いや、一言で収まるわけが無い・
・・・突っ込みどころが満載だ。どこから突っ込んでいいかわからない。さっきの黒板けしの犯人がわかつたくらいだ。」

「よろしく」

何がなんだかわからないので俺は全てをスルーした。

昼食が始まるとみんながそのグループの弁当を好きなものをとって食べていた。なんだか不思議だった。でもここにいるのが辛くなってきた。でもなんだかここに来てよかった気もした。

そのあと全員と打ち解けた。

それから放課後になった。

これから母さんに大石さんという警察官を進められたので、これから会いに行こうと教室から出ようとした。

「ねえ、雄ちゃんさー。うちの部活に入らない」

「入らない」

即答してやった。

「ガーン」

魅音が固まっていたので助けを出すことにした。

「冗談。で、何の部活？」

「我が部はだな、複雑化する社会のため、活動毎に提案されるさまざまな条件下、・・・時には順境。あるいは逆境からいにかにしてどんな部活だよっ！

とりあえず心の中で突っ込んだ。

そして、俺は口を開いた。

「よしっ、帰る！」

「つまり、みんなでゲームをして遊ぶ部活なのです」

梨花ちゃんが誰でも判るように言ってくれた。

今までの魅音の演説はなんだったんだ。三秒程度でまとまったじゃねーか。

「へえー、少しやってみようかな」

「先に言っておくけど、我ら部員はそんなに甘くないからね。本気でかかってきたほうがいいよ」

魅音がニヤついていつてくる。なんだか腹が立ってきた。

「会則第一条！遊びだからなんていう、いい加減なプレーは許さない！！」

魅音が叫びだした。

「会則第二条！そのためにありとあらゆる努力をすることが義務付けられていますのよ」

沙都子が割り込んできた。

「なんかすごそうだな……」

「で、何のゲームをするんだ」

「じゃあ、誰でもわかるジジ抜きにしよう」

「なんか思ったより普通だな」

そして魅音はトランプを俺に突き出した。

「それで罰ゲームは……」

「へえー、やっぱり罰ゲームとかあるんだ。荷物持ちとか掃除とか？」

「メイド服を着て荷物持ちなんてどうかな？」

「待て」

「どうしたの雄ちゃん？」

「メイド服なんてどこにあるんだ。あと雄ちゃんってなんだ」

「メイド服ならロッカーにあるけど」

「いや、明らかに全員の体格が合わないだろ。何枚も持てなきゃ」

「全員のサイズなら揃ってるよ！」

親指を立てて俺に突き出してきた。

どうしよう……ついていけない。

あと雄ちゃんの件はスルーらしい。

なんか、どうでもよくなってしまった。

そうしてジジ抜きが始まった。

このジジ抜きがハードになるなんて雄斗には思いもしなかった。

「じゃあ一枚抜くね」

机の中心にそのカードが裏向きで置かれた。みんながそのカードをじっと見ていた。何かあるのか気になってそのカードをじっと見てみた。

「……ん？」

俺はあることに気がついた。そのトランプには傷がついていたのだ。他のトランプもそうだ。一つ一つに傷がついている。

「みんなって、カードの傷でカードの種類って覚えてるの？」

「会則第二条ですわ。雄斗さんも勝つために最善の努力をなさいませ」

沙都子がニヤつきながら言ってきた。

「そのセリフって前に俺のときにも言わなかったか？」

圭一が横槍を入れてきた。

「圭一さんもそんなことを言っている場合ではありませんことよ」

「何を」

圭一と沙都子が闘志を燃やしあっている。というか俺の質問はどこに消えた。

「じゃあ、おじさんから始めるよ」

どうやら完全に無視らしい。こうなったら逆転の方法を考えるしかない。できる限りルールの穴を見つけないから戦えってことか。

そしてジジ抜きが始まった。

第二話 転校初日・・・（後書き）

どうも、黒狐です。

一話だけというのもなんだか寂しいので、二話をアップしました！
貯金がなくなっちゃうww

次回は雄斗の初部活！！！！

雄斗はどう戦うのかっ！？

ちなみにカードの傷を覚えるとかそういう超人能力は発揮しません。
雄斗は勉強が苦手なので・・・

そして、次回の後書きは、いつものようながっい後書きになりますww

『ザ・クイズショウ〜ひぐらしのなく頃に〜』のような後書きです。
その小説はひぐらしを知っていればOKです。

一話と二話は別のアニメキャラクターが出てきます。

ザ・クイズショウを知らなくてもOK！！！！

なんの問題もなしです。

そうですね。

新たな一つのカケラとしても楽しめるでしょう。

ひぐらしのなく頃に 罪明し編

そう、変換してもらっても構いません。

タイトルはそれと迷いました。

そんな小説です。

この小説とその小説をよろしくお願いします。

では今回はこの辺でっ！！

感想待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しい
です！

第三話 雄斗の實力

圭一がニヤニヤしながら俺の持っているトランプを選ぼうとしていた。

「くつくつく、見えるぜ。右から3、5、6、K」

「なっ」

圭一が悪魔に見えてきた。

こいつら、カードの傷を全部覚えていいのか……………

「ちなみにジジは5なのです」

「ぐはっ」

梨花ちゃんがきつちり、とどめを刺してきた。

そして俺の手札は2枚。圭一の手札は一枚。他のみんなは全員あがってしまった。それで今は圭一が引く番だ。

「雄斗、手で隠しても間から見えるぜ！」

「くっ……………」

何かで隠すことができたら……………いや、隠せるある方法で全てが隠せる！

「これで終わりだ」

圭一が引こうと手を伸ばそうとしたときに俺は手札を机の下に隠して、二枚のトランプを混ぜた。

「雄斗、諦めるんだな。何をしても手札がわかってしまっているんだから」

「雄ちゃん、諦めなよー」

「いや、違う。圭一、魅音」

そして俺はトランプを手で全て覆い隠して圭一の目の前に出した。
「どーちだ？」

俺は笑みを浮かべた。

「なっ」

「「おー」」

「いやー、雄ちゃんがこんな手を使ってくるとはね」

「さあ、どっちを選ぶ？言っとくがこれはズルじゃないからな。昔にやらなかったか、こんなことするの。えーっと、会則第二条……ありとあらゆる努力をすること……じゃなかったか」

「……やるな、雄斗」

「どうした？手が震えてるぞ」

「う、うるせえー。俺は……左だ」

「……本当に左でいいんだな？」

「ああ、それでいい。なぜならお前は確認をしたからだ！右がジョーカーならすぐに左をめくるはずだ」

圭一は左にあるランプを引いた。そのカードはジョーカーだった。

「ふっ、残念だったな……」

「なっ」

「やるねー雄ちゃん」

「面白くなってきましたわ！」

「どちらもファイト、おーです」

「すごいよ、雄斗くん」

周りからは歓声が聞こえてくる。

「まだまだこれからだぜ、雄斗。どーちだっ！」

圭一も同じ戦術できたか……俺は母さんに昔にやられた罠を圭一に仕掛けることにした。

「あれ？圭一、左手に力が入っているな」

そういつて圭一の左手に手を置いた。

「なっ、そ、そんなことねーよ」

そのときに、圭一の目が泳いだ。俺はそれを見逃さなかった。

「俺は左を選ぶっ！キングは左手にあるっ！」

俺は圭一から手を離れた。圭一が左のトランプをめくった。そのカードはKだった。

「よしっ！」

「ぐおおおおおお！」

圭一が机に倒れた。

「な、なんでわかつたんだ？」

圭一が机から起き上がった。

「俺が圭一に『左手に力が入ってるな』と言ったときに圭一の目が泳いだ。だからそのカードがKだと見破ったのさ」

「やるねえー、雄ちゃん。ちなみに、ポイントは減点制ね。着順がそのままマイナス点。トータルが一番少ない人の優勝！」

俺は5点か。ビリとあまり代わりがない。

でもこのまま負けるわけにはいかない。

「魅音、ちよつとトイレに行ってくる」

「んっ？じゃあ少し休憩ね」

俺は教室から出た。

俺が教室に戻るとゲームが再開された。

「少しみんなにお願いがある」

「どうしたの、雄ちゃん」

「トランプの傷とかがわからない俺に、ハンデとして俺にトランプを切らせることとジジを選ぶ権利が欲しい。あとトランプを配り終わると枚数に誤差が出てくる。この場合だと3人が9枚で、残りの3人は8枚になってしまふ。だから順位が低い3名はカードの枚数を8枚にして欲しい」

「べつにおじさんはいいと思うけど、みんなはどう思う？」

「別にそんなことくらいは、いいと思いますわ」

「僕も賛成なのです」

「レナも賛成だよ」

「俺はどっちでもいいぜ」

全員が反対がなかったため、俺の意見が採用された。

「はい、トランプ」

「ありがとう」

そういつてトランプを受け取った。

そしてトランプを切り始めたときに教室の引き戸が開いた。そこから顔を出したのは知恵先生だった。

「雄斗君、転校の手続きのことなんだけど少しいい？」

「はい」

知恵先生に呼ばれたので、俺はトランプを持って、そのまま教室を出た。

そして用が終わると教室に戻った。

「ごめん、何回もゲームを止めさせて」

「それより早く始めよーぜー」

「わかった」

そしてトランプを切っているとまた教室の引き戸が開いた。

「何回も邪魔してごめんね、雄斗君。これ手続きの書類」

「ありがとうございます」

俺はその受け取った封筒を机の中に入れた。

「まずはジジを抜くぞ」

真ん中のカードをすぐさま抜いて、机の真ん中に置いた。みんなはそのカードをじつと見ていた。

「じゃあ、配るぞ。上位は魅音と沙都子と梨花ちゃんだから9枚ずつ配るぞ」

そして三人に九枚連続でトランプを配り終えた。

「後は俺たちだな」

俺はレナ、圭一、俺の順番に八枚連続でトランプを配った。用意ができたところで全員が手札から揃っているカードを抜き始めた。全員がカード揃える作業を終えたが、雄斗だけは何も捨てていなかった。

た。

「雄ちゃんどうしたの？まさか、一枚も揃ってなかったの」

「をーほっほっほっほ。ざまあないですわね」

俺は笑みを浮かべた。

「ふっ……まさか、揃っているカードは……」

俺は手札を全て表側に向けた。

「全部だ」

本当に全てが揃っていた。

「なっ」

「……えっ」「……」

「あがりだ」

「雄ちゃんどんな手品使ったの？」

「どうしたのかな、かな？」

「どういうことなの」

「みー」

「なぜだー」

みんなが訴えかけてきた。

雄斗は笑みを浮かべていた。

第三話 雄斗の実力（後書き）

どうも、黒狐です。

また後書きを一人ですることにしました。

なっがーい後書きを見たいときは『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に〜でっ！

今回は若干短いのかな？

そっちの方が完結したら、こっちもなっがーい後書きに変更しますwww

今回は雄斗が使ったジジ拔きの必勝法をお教えしますっ！

現実で使えるのか！？

次回お楽しみにっ！！！！

では今回はこの辺でっ！

感想待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいです！

第四話 罰ゲームは誰の手につ！？

雄斗はジジ抜きで全ての手札を揃えることに成功。

そして、俺は種明かしをすることにした。

もうこの策は使えないし。

「俺がやったのはいかさまだ。まず俺はさっきの時間にトイレには行かずに職員室に行っていた」

「なっ！雄ちゃん、ま・・・まさか知恵先生を」

「そうだ、そして知恵先生にこう頼んだ。2分後に教室に来て、俺を廊下に呼び出して欲しいと。そして俺はトランプを持って廊下に出た。そこで俺はペアのカードを4組ポケットにしまった。そして教室に戻ってカードを切った。そしてまた知恵先生に俺に封筒を渡すことをお願いした。知恵先生が引き戸を開けたときに俺はみんなの目をだましてポケットからさっきのトランプを山札の下に戻した。そしてみんなにカードを配って残っているのは全てが揃っているカードが俺の手元に来るってわけだ。いかさまするのは禁止ではないよな？会則第二条。ありとあらゆる努力をすること。違ったか、魅音」

「あっははははーっ。さすが雄ちゃんだよ。まさか知恵先生を使うなんて。でもまだだよ。勝負はまだ始まったばかりだからね」

「そうですね。あとでボコボコにさせて見せますわよ」

「レ、レナも負けないよ！」

「ぼくも負けてられないのですよ」

「うおー、燃えてきたぜ」

みんなに気合を入れてしまったようだ。
次もなんとかしないと・・・。

この試合の結果は二位から沙都子、魅音、圭一、梨花ちゃん、レナだった。

そうして次の試合が始まった。

実は雄斗にはもう一つ策があった。

そして俺は真ん中に集まっているすべてのカードを集めた。

「なあ、魅音」

「何、雄ちゃん」

「カードの配り方ってどうする？順位が高いほうから配るとか、低いほうから配るとか……」

「んー、別にどっちでもいいよ」

「じゃあ、配り方は俺の自由ってことでいいの？」

「いいけど……」

「他のみんなもそれでいい？」

反対はなかった。全員が認めてくれた。

そのとき雄斗は笑みを浮かべていた。

「じゃあ、配るぞ」

そしてカードを魅音から配っていった。そして魅音に配る五枚目を俺の前に置いた。その後は普通に配った。でもまた八枚目を俺の前に置いた。

「ゆ、雄ちゃん……何しているの？」

「何ってカードを配っているだけけど……」

俺は笑みを浮かべて魅音に言ってやった。これがもう一つの策だ。あらかじめトランプに印を付けておき、その印のトランプを自分の手札にする。それはもちろん反則なのだ。

「それって反則じゃない？」

「いや、だって全員が配り方は俺の自由だって認めてくれたじゃん」

「……あつ」「……」

「あれっ？おじさん、そんなこと言っただけな？」

『カードの配り方ってどうする？順位が高いほうから配るとか、低いほうから配るとか……』

「すみません、そちらに大石さんという方はおりますでしょうか？
いらつしゃつたらお願いしたいのですが……」

『失礼ですが、どちら様でしょうか？』

「御神です」

『少しお待ちください』

電話の向かうから「大石さん」と呼んでいる声が聞こえた。どうやらいるみたいだ。

『はいもしもし、大石です。御神警視から話は聞いてますよ』

「はじめまして。御神雄斗です。遅くなつてしまつてすみません」

『いえいえ。じゃあこれから向かいにいきますよ。家のほうで大丈夫ですか』

「ではお願いします」

『わかりました。今から向かいます。では』

そついつて電話が切れた。

だいたい30分くらいでくるだろう。なら間に合う。

ガラガラ――

「雄ちゃん。何してるの？」

「何って電話だけど」

「早く帰ろう」

「わかつた。すぐに向かう」

そして帰る用意ができたので下駄箱の方に向かつた。

「お、お待たせ……」

そこにはまだメイド姿の圭一がいた。

「……………」

「……………」

「……………ぶっ」

思わず笑つてしまつた。急にそれを見ると思わず笑つてしまつた。

「ゆ、雄斗おおおおおー」

離見沢分校には圭一の声が響き渡つた。

そんなこんなで魅音と圭一とレナで家に帰っていた。沙都子と梨花ちゃんも帰り道が逆なのですぐに別れてしまった。

俺の横にはおかしなメイドさんがいる。

「ほ、本当にそれで帰るんだな……」

「ああ、強制だからな」

「……ぷっ、くすくすくす」

駄目だ。耐えられない。

「く、くそおおおお。お前もいつかメイド服を着させてやる！」

「あはははははは。次は雄ちゃんの番だよー」

「雄斗君のメイド姿見てみたい」

「あはは。やって見れるならやってみろ！」

「強気だね、雄ちゃん」

「勉強と力は弱いけど、こういうことだけは強いからな」

「雄斗っ、絶対罰ゲームを受けさせてやるっ！」

圭一は俺に指を指して宣言してきた。

もちろんメイド姿で……

「ふふっ、あはははははは」

いろんな意味で俺は限界だった。

「もう慣れるよっー！！！」

「あはははははは」

そんな会話が続けていた。

第四話 罰ゲームは誰の手に!? (後書き)

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、始めました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの黒狐です。今週からこのようなラジオ形式で後書きをやっていると思います。では『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に『』でやっていた『トーキングKK』と何が違うのか。『トーキングKK』は圭一と二人でやっていましたが、このラジオでは毎回ゲストを呼んで、番組を進行していきたいと思います。ひぐらしのメンバーでこの色が何も無いラジオに色を付けていこうと思います。

では今回のゲストをご紹介します。初めてのゲストはこの方ですつ!!!」

圭一「みんな、俺、前原圭一。よろしくー」

黒狐「今回のゲスト、おなじみの前原圭一さんです」

圭一「ついに俺はメインを降ろされたかー」

黒狐「いろいろ考えた結果なんで、そこは謝るしか無いですね」

圭一「まあ、そんな気はしてたけどな」

黒狐「では、今回の話ですが、私が書いている『TRUTH』のオリジナルゲームを考えているとき、この必勝法が浮かんだ訳です」

圭一「まあ、普段では気軽に使えないな」

黒狐「まあ、そうだな。ひぐらしならではのものと考えてください。

超能力的なものは嫌だったんで」

圭一「今後の展開にも期待だな」

黒狐「ぜひお楽しみにっ!!!」

圭一「ここまではなんだか『トーキングKK』と一緒にだな」

黒狐「今のところは、全く色がついてないですからね。圭一が来たことに寄って『トーキングKK』色に染まってしまったんじゃない

か？」

圭一「そうだな」

黒狐「この番組は我々だけで色を付けていくのではありません。色を付けるのはこれを見ているあなたもですっ！」

圭一「おおっ！！！」

黒狐「そこでみなさんにどんなことをして欲しいかなどの要望を感想の方にでも書いてください。みなさんでこのラジオに色を付けていきましょうっ！！！」

圭一「また、このラジオに来るのが楽しみになってきたな」

黒狐「企画大好きな黒狐に協力や応援をお願いします」

圭一「最近の小説づくりは順調か？」

黒狐「まずまずですね。最近アイデアがバンバン出てくるので。最近悩んではいることは、バトルスピリッツの新しいパックが出たので、それにたくさんつき込んだことかな」

圭一「金の問題かよっ！」

黒狐「あと時間がないことかな」

圭一「もう『トーキングKK』と同じだな」

黒狐「そうだな」

圭一「何か今から新しいこと始める？」

黒狐「黒狐の今週のおすすめっ！」

圭一「だから一緒じゃねーかつ！」

黒狐「圭一の罰ゲーム」

圭一「なぜいきなり罰ゲームしなきゃいけないんだよっ！」

黒狐「黒狐と圭一のバトスピー本勝負」

圭一「俺、知らねーし」

黒狐「黒狐……」

圭一「考えてんじゃねーよっ！もういいか」

黒狐「いいと思うぜ」

圭一「じゃあ、また今度のお楽しみにするか」

黒狐「ああ、最後にはいつものやつやるぞっ！」

圭一「まあ、ちょっとだし、やろっぜっ！」

黒狐「じゃあ、やります。では今回はこの辺でっ！」

これからこのラジオにどんな色がついていくのか？

『ひぐらしの彩るラジオ』のお相手は、黒狐とっ！」

圭一「前原圭一でっ！」

黒狐・圭一「お送りしましたっ！……！」

黒狐「感想など待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいです。皆様のご協力お願いします。気軽にどうぞっ！ツイッターもやってます」

今回の黒狐の心の叫びっ！

黒狐「これからどうしよーかーっ！……！」

圭一「未定なのかよっ！」

第五話 雛見沢連続怪死事件

「雄斗君の家ってこの近くだったんだね」

「ああ。ここにちょうど空き家があったからな」

魅音と圭一と別れた後、残ったのは俺とレナだけだった。しかも家が近かったのだ。俺の家の三軒隣だった。

「じゃあ、私ここだから。またね、雄斗君」

「おう、また明日」

すると俺の家の前に白い車が止まっていた。

「んっ？」

その車の近くにジャケットを小脇に抱えている小太りの人がいた。

「御神雄斗さんですよね？」

「はい。ということは大石さんですか？」

「ええ。はじめまして、大石です」

「はじめまして、御神雄斗です」

そういつて握手をした。

「少し出ましょう。どうぞ、車に乗ってください。私、クーラーがなんかかけちゃいますから冷えすぎたらいつってくださいよ」

俺はその車に乗った。

そして大石さんは車を走らせた。

「聞いてますよ。期待の名探偵だって」

「ぼくなんかまだまだですよ」

そして車が動き出した。

「ところで御神さんはどこまでこの事件について知っているんですか？」

俺は自分が雛見沢連続怪死事件の知っている全てを話した。

「大体は合ってます。全ての始まりは10年前の雛見沢ダム建設計画からです。その計画は国が雛見沢一帯に巨大なダムを建てるという計画があったんですよ。当時では電力の供給と治水が莫大な経済効果を生み出していたので、ダムの建設はラッシュでした。当然反対運動が起こった。裁判にもなったし、議会でも取り上げられました。そのことは知っているでしょう。新聞にも取り上げられましたし」

「昔に聞いたことがあります」

「そして、当時の総理である犬飼総理の息子の犬養毅君が誘拐されました。その後にはさまざまな不祥事が出てきて、ダム計画は中止になりました。そして、その年に一年目の事件が起こりました。そこからあなたは調べたとおりです……これは余談なんです。雛見沢には怖い昔話があるんですよ」

「昔話？」

「ええ。雛見沢はね、鬼の住む里と呼ばれていたんです。里に下りてきて、人をさらって、食い散らかしてしまうという怖い昔話があるんですよ」

「それが何か関係でも」

「過去の事件はその条件にあってしまっんですよ。一年目の事件では六人の犯人のうち一人は逃走中。こうも考えられるんです」

「神隠しにでもあったと？」

「ええ。その通りです。でもここでは鬼隠しと言われています。話を戻しますが、翌年の事件はダム推進派であった北条夫妻の夫が死んで妻が行方不明。その翌年はこの神主である古手夫妻が亡くなっています。夫は急性心不全で亡くなり、妻は入水自殺です。遺体は見つからず、見つかったのは遺書と沼の前に添えられたぞうりだけですよ」

「北条と古手というのは……古手梨花と北条沙都子の親なんですか？」

「……残念ながらそうです」

「そ、そうですね……」

「四年目は北条沙都子さんの叔母と呼ばれる人が死んで、北条沙都子さんの兄であつた北条悟史さんが行方不明です」

「なっ！」

「四年目は指定捜査指定がかかつてるから知らなかったでしょ」

「ええ」

「その全ての事件は一人が死んで一人が行方不明になることです」

「それは祟りのせいだとも？」

「いいえ。犯罪を起こすのは人間ですよ。連続怪死事件は祟りに見せかけた人間の犯行です」

「……その事件の中で何かおかしい点は？」

「まずは二年目から話します。北条夫妻は柵が壊れて崖から落ちたそうです。亡くなられた現場には北条沙都子さんがいたんです。現場といつてもその近くの駐車場ですけど」

「何か問題でも？」

「ええ。その駐車場からはその現場が見えなかった。でも彼女は声をかけた作業員に沙都子さんはお父さんとお母さんが崖から落ちたと言つたそうです。そのことを聞いても答えてくれませんでした。覚えてないらしいです」

「……」

「四年目ですが……その前に北条沙都子さんとその兄は叔母と叔父から暴行を受けていたらしいんです」

「……ということは兄が叔母を？」

「はい、私もそう考えていたんですが警察に別件で留置されていた麻薬中毒者が祭り当日の犯行を自供したんですよ。そしてその男は留置所で自殺したんですよ」

「隠蔽工作ですか？」

「たぶんそうですね。そのせいで事件は解決してしまつて捜査は終了です。最後にそれらの全ての事件は毎年綿流しというお祭りに起きているんですよ」

「・・・・・・・・綿流しはいつですか？」

「来週の日曜日です」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

大石さんがブレーキを踏んだ。あたりは興宮の中だった。ずいぶん遠くまで来てしまった。さらに一時間も経っていた。

「じゃあ、何か飲み物買いに出てきます。御神さんは何がいいですか？」

「じゃあコーヒーで」

「わかりました」

大石さんが車から出た。

俺はしばらくその事件について頭の中で整理をしていた。

すると大石さんが車に戻ってきた。

「どうです。何かわかりましたか？ずっと何かを考えているようにも見えましたが・・・・・・・・。どうぞコーヒーです」

「ありがとうございます」

そういつてコーヒーをもらった。そのコーヒーを一口飲むと俺は口を開いた。

「・・・・・・・・多分この事件の犯人はオカルト好き。さらにその犯人は大きな組織を持っている。そういうことくらいです」

「ええ、私もそう思っています」

「でもその犯人は途中からじゃないでしょうか」

「どういうことです？」

「この事件の犯人は一年目と二年目に起こったことを利用して三年目、四年目と事件を起こしていつてるんじゃないですか」

「私はそうは思いません。私はね、園崎家を筆頭とする御三家を疑っています」

「御三家とは？」

「園崎家、古手家、公由家。それらを御三家といいます」

「園崎家はそんなに大きな組織なんですか？」

「ええ。園崎家が現在難見沢を支配しているんです。そしてその頂

上にいるのが園崎お魴っていう婆さんです。雖見沢と周辺の町の親族の数千の票を固めて政治家も頭が上がりません」

「そんなに大きかったんですか。じゃあ北条家は園崎家に許してもらえたのですか？」

「いえ、北条家は今、村八分にする大号令をかけられています。つまり除け者にされています」

「なっ！それは沙都子ですか」

「ええ」

「園崎家が犯人だという証拠は何かありますか？」

「いいえ、残念ながらそういったものは掴んでいません。でも諦めませんよ。おやっさんの仇をうつてやりますよ！」

大石さんは右手の拳を強く握った。

「すいませんが、おやっさんとは？」

「ああ、すいません。私の親父でもあり、兄貴であり……親友のような人です。ですが最初の怪死事件で殺されました」

「そうですか……すいません」

「いえいえ、構いませんよ」

「……大石さんのいうことも一理あると思います。ダム建設を止めさすために犬飼総理大臣の息子をさらい、ダム工事の監督を殺害。そして二年目にダム賛成派であつた北条夫婦を殺害する。

それを行うことは園崎家には確かに可能だ。でも三年目からは園崎家には何の得もない。ということは途中から犯人が変わっていることになりませんか？四年目は北条悟史さんが沙都子を守るため……

。では誰が古手夫妻を……」

すると車が動き出した。

「もうすぐ暗くなるので戻りましょう」

「そうですね。今はこのくらいしかわかりません」

「んっふっふ。さすがに名探偵もお手上げですか？」

「でも必ず犯人を見つけます」

俺は残りのコーヒを一気に飲んだ。

「心強いです。んっふっふ」

「大石さん……100%の確証がない限り、犯人を決め付けないほうがいいですよ。後に悔やみきれない後悔しますから」

「……………」

第五話 難見沢連続怪死事件（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、始めました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの黒狐です。

ではさっそく、今回のゲストをご紹介します。二回目のゲストはこの方ですっ！――」

レナ「はうー！竜宮レナだよ――！」

黒狐「今回のゲスト、竜宮レナさんですっ！レナは別のひぐらしの小説『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に』でも出演してましたね」

レナ「あれは面白いけど、ほぼ圭一さんと詩いちちゃんメインだから」
黒狐「そんなことないと思うよ、結構レナも出てたと思うけど」
レナ「うーん、どうだろう？」

黒狐「詳しくは『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に』を見てください。それで、レナはメインかサブかは皆さんが決めてください」

レナ「さりげなく宣伝だね、だね！」

黒狐「そういうことはあまり言わないで欲しいな……」

レナ「それで黒狐さんってさっきパソコンいじりながら何食べてたの？」

黒狐「んっ？さっきは…『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に』の最終回を書きながら、ドーナッツ食べてた」

レナ「おいしそうだなー」
黒狐「三つで100円安物だよ。ただのパンに砂糖まぶしたものだけど」

レナ「表現が酷いかな、かな」

黒狐「食べる？」

レナ「じゃあ、いただきますーす！」
もぐもぐ……」

レナ「うん、普通だね。」

黒狐「普通だよ。ちなみにあと一個は明日の朝ご飯」

レナ「なんか悪いことしちゃったかな、かな？」

黒狐「いいよ別に、コーヒーメインだし」

レナ「またクッキー持ってくるね」

黒狐「レナ……ぐすつ……」

レナ「号泣以上の涙が出てるけど……」

黒狐号泣中www

レナ「そんなことより小説の進み具合はどうなのかな、かな？」

黒狐「ぐすつ、この小説はいい感じかな？でも、オリジナルの方が
手こずってる」

レナ「頑張つてね、黒狐さん」

黒狐「よしっ、クッキーのためなら授業中にも書くか」

レナ「それはよくないかな、かな」

黒狐「でも、基本的には夜だけだな」

レナ「大変だね。今日の昼とか書けなかったの？」

黒狐「ああ、駄目だな。朝はバトスピのシヨップバトル行つて、
昼から大学。ちなみにバトスピのシヨップバトルでは優勝してきた
ぜっ！」

レナ「バトスピって何かな、かな？」

黒狐「カードゲームだよ。俺のお気に入り。レナの横にあるバツ
クの中にカードが入ってるだろ？」

レナ「見てもいい？」

黒狐「うん」

ぱかつ

レナ「はうー、おっ持ち帰りいいいつ……！」

黒狐「な、なぜ暴走っ！？あつ、あれ黄色のデッキだ。わからない

人のために説明します。黄色で気というのは天使や、かあいい動物が書かれているカードが多いのが黄色の特徴です。天使は結構人気ですけどね。正確には天霊ですけど…興味がある人はぜひやってみてください。結構ハマりますよ。バトスピは組み方が違うだけで、バンバン内容が変わってきますから。ブシロードの嫁制、自分のパートナーを決めるやり方とかないので楽しいですよ。ブシロードのTCGもいいけどな」

レナ「はう、かあいいよー。はうっ！？これもかあいいよー！！」

黒狐「なっ！全てのカードをあさってるっ！！片付けるのが面倒になるな」

レナ「はう、はうー！！！」

黒狐「おーい、レナ。戻ってこーい」

ひよい

黒狐「うわあああああつ！！！」

スパパパーンッ

黒狐「ぐっ」

バターンッ

黒狐「うっ、ヤバい、し、しばらく立ち上がれない」

レナ「取り上げるのは良くないと思うな」

黒狐「あとで好きなだけ見せてやるから、今は続けような」

レナ「はうー、じゃあとでいっぱい見せてね！」

黒狐「じゃあ、もうこんなに時間が経ったからまとめといくか」

レナ「うん」

黒狐「圭一のとくと全く違う感じになるな。圭一だとバンバン突っ込む感じだけど…」

レナ「次は誰なのかな、かな？」

黒狐「更新するときにクジで決めてる。だからまだ決まってるない」
レナ「クジなんだ」

黒狐「本当はレナのコーナーとして、かあいいものを紹介するコー

ナーとかやろうと思ったんだけど」

レナ「何を紹介しようとしたの？」

黒狐「バトスピだよ。レナに見せたデッキが最近強くなったし、黄色デッキでも紹介しようかなーって」

レナ「うっかり、見せちゃったってわけ？」

黒狐「うん」

レナ「次回も楽しみにしてるね」

黒狐「もうすぐ『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に』が終わりますので、何を制作するか考えてます。

一つ目はアニメキャラにバトスピをさせる小説

二つ目は学園もののファンタジー小説的なもの

三つ目は『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に』の続編かな」

レナ「いろいろ考えてるんだね」

黒狐「少し時間もらってもいいですか」

レナ「いいよ。何するのかな、かな？」

黒狐「今週の土曜日に映画を見になんばに行きました。映画『探偵はBARにいる』マジでサイコーっ！！大泉さんはすごいっ！！今までの探偵というものが変わる」

レナ「そんなに凄いの？」

黒狐「ああ、大人の映画とでも言うべきだな。今まで見てきたものと全然違う。大泉さんの演技もすごいっ！！福山雅治の『ガリレオ』『容疑者Xの献身』も凄いいけどな」

レナ「すごそうだね。また何かお勧めなものあったらお知えてね」

黒狐「ああ。もう時間なので今回はこの辺でっ！さて、これからこのラジオにどんな色がついていくのか？次回のゲストは誰なのか？

『ひぐらしの彩るラジオ』のお相手は、黒狐とっ！」

レナ「竜宮レナでっ！」

黒狐・レナ「お送りしましたっ！！！」

黒狐「感想など待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれば嬉しいです。皆様のご協力お願いします。気軽にどうぞっ！ツイッターもやってます。バトスピ小説をやって欲しいなーって人は感想にやって欲しいーって書いてください。そして、混ぜて欲しいアニメがあれば書いてください。今のところはアイマスかな？遠慮なんてせずにはんばん感想送ってくださいっ！！！」

今回の黒狐の心の叫びっ！

黒狐「大泉さん、マジですげーっ！！！水曜どうでしょうっ！！！」

レナ「凄くハマってるね…」

第六話 調査開始!!!

そして俺の家に着いた。

「ありがとうございます」

「いえ、また何かわかったことがあれば連絡をください。お待ちしておりますよ。んっふっふ」

「最後に一つだけいいですか？」

「ええ、どうぞ」

「園崎家以外に大きな組織がありますか？」

「んー、難見沢にはそれだけだと思います」

「他には、違うところとつながってるところとかは？」

「さー、わかりません」

「そうですか……」

俺はドアを開けた。

「今日はありがとうございます、大石さん。また何かあったらお願いします」

「わかりました。こちらこそよろしくお願いします」

そういうと大石さんは車を走らせた。その車はどんどん離れていった。

そして家に入ろうとした。すると……

「雄斗君」

誰かが俺を呼んでいた。

振り向くと後ろにレナが立っていた。

俺は考えだすと周りが見えなくなってしまうのだ。なので、心臓が飛び出す……いや、破裂するような驚きだった。

「ど、どうした？」

「あのね、夕飯を作りすぎちゃっておすそ分けしようかと思ってね。よかったら貰ってくれる？」

「ああ、ありがとう。夕飯はまだだしな」

「そう、よかった。今までどこか行ってたの？」

「あ、ああ、知り合いに合ってたんだ」

「へえー、知り合いいたんだ」

「ああ」

「じゃあ、これ」

そして、俺はレナから弁当箱を貰った。

かなり大きかった。そのほうがとても助かる。

でも、冷蔵庫の今日で腐る肉をどうしようか……

「まあな。このお礼はまた何かしてやるよ」

とりあえず、気にしないことにする。

「い、いいよーそんなの」

「じゃあ、またな」

「またねー」

そうして俺は家の中へと入っていった。

「ここが……ダム現場か……」

俺は次の日、連続怪死事件の現場を見えることにした。午前中は二年目の白川公園での転落事故現場に行っていた。確かに大石さんの言うとおりであった。

耳にはイヤホンを付けていた。

雄斗は音楽を聴くことが好きだ。いつもウォークマンを持ってる。そして、考えるときや、疲れたときにもってこいだ。

やはり沙都子を疑わなければならぬのか？でもまだ決まったことじゃない……だめだ……何か感情的になっている……

今は連続怪死事件の一年目の事件現場のダム現場に来ている。でもその場所はすっかり変わっており、大きな粗大ゴミの山がたくさんあった。

そして辺りは夕日に包まれてきた。

「・・・・・・・・・・」

どうしていいかわからなかった。なぜか雛見沢に来てからわからないことが増えてきたようだ。

大石さんから聞いたことだが、ダム戦争の攻防戦はかなり激しかったらしい。シヨベルカーなどのエンジンに砂糖を混ぜたり、大音量でお経を流したり、乱闘が起こったりなどしていたそうだ。少し奥のほうにシヨベルカーが一台見えた。

とりあえずダム監督がバラバラにされた現場を見えることにした。でも、そこにたどり着くまでがかなり大変だった。山のように詰まれた粗大ごみの足場はかなり不安定だった。そして、最初の地点に戻ってくるまで一時間以上かかってしまった。

どれだけ広いんだ……

しかも成果は無し。ただ疲れただけで終わってしまった。

「えっと……次は・・・・・・・・・・」

俺は手帳を開いた。

その手帳はいつも使っているものであり、事件についていろいろなことが書かれている。もちろん秘密だ。誰にも見せたことは無い。

さて、もう行くか……

「あれ？雄斗君。こんなところでどうしたの？」

レナが現れた。

「うわっ！」

また心臓が破裂しそうになった。

「ほんとだ。雄斗じゃねえか」

後ろから圭一が現れた。

「圭一も一緒なのか？」

「ああ」

「な、何でこんなところに。ゴミしかないのに……」

俺は何かあるのかと思い、周りを見渡した。

「……はうつ。ゴミじゃないもん。たっ宝の山なんだよ！だよ！」
レナが急変した。急変といっても怒っているわけではない。なぜなら……顔がかなりにやけていたからだ。

甘いものを今から食べるようなおだ。何ヶ月ぶりに食う顔なんだ？あれは。

「お持ち帰りいい！！！」

そして、そのままゴミ山のほうへ走っていった。しかもかなり速いスピードで。

俺はただただそれを見るしかなかった。

「雄斗、お前の気持ちはわかるぜ」

ぼんつと圭一が手を肩に乗せてきた。

「ゴミに見えてもレナの中では宝物らしいぜ」

「それはそうとレナって走りが速いのか？」

「ああ、かぁいいモードのレナは超人のような動きをするんだ。もうすぐ部活で嫌でも思い知るかもな」

「ははは……」

また謎が増えた。俺は笑うしかなかった。

「しかしここで何してたんだ？」

「ただ雛見沢を観光してただけだ」

「へえー」

「そんなことよりお前はレナとデートか？」

「ち、ちげーよ。暇だったから宝探しに付き合っただけだ」

俺と圭一はしばらく話し合った。そして日が暮れそうになっていた。レナはずっと宝探しをしていた。

「あれっ、これなんだ？」

そういつて圭一は何かを拾った。

「んっ？なんだ手帳か……て、手帳っ！！！」

俺の手にはあるはずのものが無かった。

ポケットにも無い。

「どうしたんだ？」

「いや、あ、あの……うおりゃあああああつ……！」

俺は圭一の手握られている手帳を全力で取り返した。

「な、なんだよいきなりっ！」

圭一は鳩が豆鉄砲を食らったような顔であつた。まあ、当然と言えは当然だが……

「こ、これ……俺の手帳なんだ」

「何が書いてあるんだ？」

「まあ、何でもいいじゃないか」

「そうだな……つてよこせえええっ……！」

圭一は素早く俺に飛び込んできた。

「うわああああああ」

俺は間一髪でよけた。そして距離をとった。

「よこせつてなんだよっ……！」

「何か気になるから」

「秘密だ秘密っ！」

「ぶー、ぶー」

「言つてろっ……！じゃあ俺は用事があるからもう行くわ」

「おう、また明日」

「ああ」

そうして俺たちは別れた。

第六話 調査開始！！！（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、始めました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの黒狐です。今回も時間関係なしで喋っていきたいと思います。」

ではさっそく、今回のゲストをご紹介します。三回目のゲストはこの方ですっ！！！」

羽入「あうあうあう 羽入なのです」

黒狐「今回のゲストは羽入さんですっ！」

羽入「やっとの登場なのですよ」

黒狐「厳正なクジの結果です」

羽入「ボクは強運の持ち主なのです」

黒狐「ではいつものようにgdgdgdトークいきましょう」

羽入「もう、最初の時点からgdgdgdなのです」

黒狐「羽入はこの小説どう思う？」

羽入「つまらないのですよ。ボクが出てないからです」

黒狐「ストレートすぎる」

羽入「それで、ボクはいつ出るのですか？」

黒狐「未定」

羽入「あうあうあう、ひどいのですよ、黒狐はひどいのですよ」

黒狐「羽入、これを見る」

羽入「あう」

黒狐「俺はひどいか？」

羽入「やさしいのです」

黒狐「はい、シュークリーム」

羽入「あうあうあう」

黒狐「羽入はシュークリームを幸せそうに食べています。食べ終わるまで一人でトークでもしたいと思います。『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に」は最終回をめたく向かわせていただきましてっ！さらにもうすぐ1万5千アクセス突破っ！！本当にありがとうございます。そして、この小説の方は今のところは超順調です。約一週間に一回のペースは守っていますwww」

羽入「もう、私のコーナーにいつてもいいですか？」

黒狐「ああ、目がめっちゃ輝いてる」

羽入「羽入のコーナー『オヤシロさまへのおそなえものっ！！』」

このコーナーは毎回黒狐さんのおすすめのあま〜いデザート
を羽入に献上するコーナーなのです」

黒狐「ちょーっとまったー！！！」

羽入「あうっ！」

黒狐「ただ、献上するだけでは面白くはない。だから、献上するあま〜いものは二つ用意します。ひとつは本当においしいあま〜いデザート。もうひとつは、あま〜いデザートの中に何かが入ってます」

羽入「あうあうあう、余計なお世話なのです」

黒狐「今回、持ってきたあま〜いものは、不二家のペコちゃんのほっぺですっ！！！」

羽入「あう〜！！！」

黒狐「先日、食べる機会があつて、食べた時、叫んだほどおいしかった。クリームはもちろん！外側のスポンジ生地もサイコーにうまいっ！！王道のスィーツだっ！！！！！」

羽入「あう〜、もう食べたくてしょうがないのですっ！！！」

黒狐「では、羽入。当たりのペコちゃんのほっぺ、はずれの梨花ちゃん特製の梨花ちゃんのほっぺ。さあ、どっちを選ぶっ！！！」

羽入「あうっ！梨花の陰謀ですかっ！しょうがない、これもあま〜いものを食べるひとつの試練。ボクはこっちを選ぶのです」

黒狐「じゃあ、俺は残ったこっちな。自分も梨花ちゃんのほっぺを食う可能性もあるから怖いよな」

黒狐「ではっ！」

黒狐・羽入「いったきまゝすっ！！！」
ガブッ！！！」

黒狐「げほっ！げほっ！マジでやばい。これはだ、げほっ！」

羽入「あうゝとてもおいしいのですよっ！！！！あうあうゝ
あまい、あまいのでひゅゝ！！！」

黒狐「げほっ、げほっ、ガチでやばい。げほっ、ハンパない」

羽入「みなさんもお近くの不二家にお求めにいつてみてはどうでしょうか？」

黒狐「はあ、はあ、げほっ、梨花ちゃんのほっぺ…辛いつてレヴェルじゃない…」

羽入「見てて辛そうなのです。文字違いますですよ？」

黒狐「何を入れればこう辛くなるのか？つてか辛さを飛び越して痛すぎる。羽入も食う？」

羽入「断固拒否なのですっ！！！」

黒狐「げほっ、駄目だ、げほっ、まだあ、げほっ、げほっ、うぎゃああああああああああ」

羽入「梨花のほっぺ恐るべしっ！！！！黒狐さんがダウンしたので、今回はこの辺でっ！！！！えーっと、これからこのラジオにどんな色がついていくのか？次回のゲストは誰なのか？

『ひぐらしの彩るラジオ』のお相手は、羽入とっ！」

黒狐「くろぎい、げほっ……」

羽入「黒狐さんでお送りしました

感想など待つてるのです！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいのです。皆様のご協力お願いしますのです。軽い気持ちで感想など書いてくださいなのです 黒狐さんはツイッターもやってるので、そちらのほうもチェックなのですっ！！！」

今回の黒狐の心の叫びっ！

黒狐「げほっ…がんぞうや、おだより、げほっ、げほっ」

羽入「このコーナーや、本編の感想が欲しいそうなのです
協力おね
がいするのです」

第七話 ゲーム大会！

次の日、俺は興宮に来ていた。その理由は雛見沢連続怪死事件の調査ではない。今、俺がいるところは小さなおもちゃ屋だった。

どうやらそこでゲーム大会があると魅音から聞いたのだ。聞いたといっても昨日の夜だ。いきなりすぎるだろと言ったが、ごめんごめん片付けられてしまった。そして場所と集場所だけ言われてすぐに電話を切りやがった。予定がなかったからよかった。でもまた調査しようかと思っていたがその予定はパーになってしまった。最近、ってか最初から流されることが多いな……

そして、自転車で興宮に来たのだ。そこで魅音達と合流した。

「さあ、入った入った」

そういつて魅音が店の中へと入っていった。

でも中はかなり混雑していた。小さい子や同年代のような人もいた。その中には俺たちと同じクラスの人も混じっていた。

「まさかこれって部活会場なのか？」

圭一が魅音に言った。

「驚いたかい？私、この店のおじさんと仲良しだね。たまに客寄せイベントでゲーム大会させてもらってるんだよ。なんと今日の優勝賞金は5万円……！」

「5万っ……」

俺と圭一は声をそろえて驚いてしまった。

俺はてっきり図書カードとかそんなものだと思っていた。ってか5万ってやり過ぎじゃねえか？

「言っとくけど優勝は譲らないよ！」

そういつて俺と圭一の方を叩いた。

「雄ちゃんにはこの前の借りをかえさせて貰うよ!」

そして、魅音は店のどこかに消えていった。

「5万円なんてよく出すな。この店」

すると沙都子が横から言ってきた。

「知らないんですの？優勝賞金の5万円は魅音さんの自腹でしてよ」

「「なっ!」」

また圭一と声をそろえてしまった。

「勝つつもり満々だな」

横を見ると圭一が笑みを浮かべていた。

そして魅音による大会のルール説明が始まった。

「参加者は18人。これをくじ引きで六卓に分けて、それぞれの卓から一人勝者を出す。それぞれの勝者はトーナメント式で決勝にコマを進めていく。各宅の競技方法はマスターに決めてもらう。いいね?」

「じゃあ、みんなくじを引いてー」

それから全員がくじ引きに動き出した。

「当然分かってると思うけど、部活メンバーには罰ゲームが付くからねー。じゃあがんばってー」

そして全員がくじ引きを引き終わった。結果はなんと部活メンバーがきれいに6つに分かれたのだ。

魅音、なにかしたな。

俺はそう確信した。

「じゃあこのテーブルはこのゲームにしよう!UNO」

この店のマスターがUNOというカードゲームを持ってきた。

久しぶりだなー。小学校以来じゃないか。このゲームならいける!なぜなら俺には相手の行動を読むことができる。人は嘘をつくと目を泳がせたり、瞬きの回数が速くなったりする。いつも犯人を追

い詰めたり、探し出すときなどに使っている。

そして勝負は最終局面に入っていた。他の卓を見ると一つ終わっているところがあった。そしてその卓の近くには飲み物を飲んでいる魅音の姿があった。その顔は勝ち誇っているような顔だった。

やはり魅音か……。

「ウノ!!!」

その男の子は赤の1カードを出した。

俺の順番の次の人が手札が一枚になってしまったのだ。そして俺の番が回ってきた。手札は俺が2枚、他の人は1枚と4枚だ。

「ふっ、その様子だと最後のカードは赤だな」

「えっ！」

「残念だが俺は青の1をだす。そしてウノ！」

そして青のまま俺のターンが回ってきた。

「俺の最後の手札は青だ。これで勝ちだ」

俺は手札が0枚になった。俺の勝ちが確定した。

そして魅音に近づいていった。

「さすがだな、わが部長は」

「ふふふ、この部長をなめてもらっては困るね。次はこの前みたいにはいかないよ」

「ああ、もちろんだ。本気を見せてやるよ」

「望むところだよ！」

俺は周りを見渡した。

「しかしこうやって見ると各卓はすごいな」

「さすが部活メンバーって感じだよ」

レナのやっているゲームはかるた。凄いところはマツハの速さで札を取っていく。かるたの絵はかわいいのばかりだし。それは他の人には勝ち目がないはずだ。もう勝負が確定したものだ。

沙都子のやっているゲームはトランプを神経衰弱だ。凄いところは人が見てないところでトランプをすり替えていることだ。そんなこともしてもよかったのかはわからないが……。

梨花ちゃんはどこよりも凄かった。ちなみに梨花ちゃんがやっているのは魚釣りゲームだ。

「わー、釣れましたのです」

梨花ちゃんが一匹魚を釣ると……。

「梨花ちゃんうまいっま〜いっ」

「梨花ちゃんの圧勝だよ。すごい！」

「わーいですー」

「……………」

なんだこれは！？

梨花ちゃんは相手の戦力を全て奪ってしまったのだ。しかも相手は手に釣竿を持っていない。俺は啞然として見ていた。はつきりいつてこんな勝負は見たことない。

「問題は……圭一だな」

圭一のゲームは百万長者ゲーム。ルーレットを回すだけの運のゲームだ。俺は人生ゲームしかやったことはないがルールは一緒だろう。

卓を見ると圭一のお金は他の人よりも明らかに少なかった。他の人は確か同じ学校の下級生だった。

「そうだね……それじゃっ、励ましてきましょうかね」

そういつて圭一の卓に魅音は向かっていった。

そこでは何か言い争いのようなものが数十秒あった。言い争いといつても魅音が一方的にしゃべっているだけだ。

すると魅音が去ると圭一はゲームを対戦している人と話し合いになった。

「何を言ったの？」

俺は戻ってきた魅音に聞いた。

「んっ？本気を出せって言っただけ」

んっ、本気を出す？

そして数十秒後経った。

「……ゲーム終了ー！！！」

「俺の完全勝利だ」

圭一が勝利したのだった。

ははは・・・これはゲーム関係ねえーな。

多分圭一は他のプレイヤーを説得したのだろう。どうやったかは知らないが・・・。。。。その卓の百万長者ゲームを見ると、ゴールのマスに誰の駒も置かれていなかった。

こうして部活メンバーが全員勝ち抜いたのだった。

「よおおし！！魅音！次は直接勝負だ！！！！」

圭一がかなり燃えていた。だが・・・。。。

「ごめん、圭ちゃん。私、これからバイトー」

「何ー！」

圭一はすっ転んだ。

「せっかく熱くなってきたのについてないよ。叔父さんの店のレジが足りないって電話あつてさ」

「そつか。バイトじゃしょうがねーな」

そして圭一と魅音は熱く語り始めていた。

「みんな今日はありがとう。おかげでイベントが大盛り上がりだったよ」

この店のマスターが部活メンバーに言ってきた。手にはなにやら紙袋が数個握られていた。それを俺たちに差し出した。

「これ今日のお駄賃に」

「・・・わーっ」

魅音以外の全員が貰った。

「私にはないのー？善郎おじさん」

「親戚にはナシ！」

魅音は頬を膨らましていた。

レナと沙都子と梨花ちゃんが貰った袋の中身はかわいいぬいぐるみだった。

「じゃあ、俺たちのつて・・・。。。」

「た、多分・・・。。。」

二人が中身を出すと予想通り女の子向けのものだった。俺と圭一はかわいい人形が入っていた。

「やはり……」

「予想はついていたがな」

「あはははっ。ふたりともには似合わないのが出てきちゃったねー」

「かわいいのは認めるんだが……」

「これが家にあるのって見られたくないな。絶対誤解されるな」

「ああ、そうだな……」

俺は魅音が一瞬欲しそうな顔をしたような気がした。なぜかそんな気がした。

「レナ、これ前のおすそ分けのお返しとしてやるよ」

俺はレナにその人形を渡した。

「くれるのっ！レナに！」

「ああ、お返しするのは当たり前だからな。じゃあ……圭一もお返しすべきだよな」

ニヤニヤしながら圭一に言ってやった。

「えっ！何のことだよ！」

「自分で考える。今日のことをな！」

「た、たくっ」

圭一は魅音の向かっていった。

「……ほれっ」

圭一は魅音に人形を渡した。

「えっ、ど……どうしてわたっ私なのさ！お、おじさんにはこんな女の子っぽいのに合わないよっ！」

魅音は顔が真っ赤になり、あたふたしていた。

俺は笑みを浮かべた。

「魅音、さっきからその人形がほしって顔に書いてあるぜ、魅音」

「書いてない！書いてない！」

よりあたふたしだした。

「おいおい。別に女の子じゃないと人形は渡せないとかいう考え方

「じゃねえぞ」

「そ、そうなの？・・・じゃあ女の子じゃなくても受け取ってもいいんだ・・・？」

横で俺やレナや沙都子が笑い出した。そのせいで魅音はさらに真っ赤になっちゃった。

「男が仲間に贈ったもんだぜ。大事にしなかつたら承知しないぞ！」

「う・・・うん・・・。言っとくけどこれは圭ちゃんの顔を立てるために仕方なく受け取るんだだけだからね！？」

「へえー仕方なくねえー」

「そ、そうだよ！」

それから圭一と魅音のそういう会話が続いた。

「じゃあバイトに遅れるからもう行くよ！」

そういつて魅音は走り出していった。

「あはははは、圭一君、百点満点かな、かな！」

「魅音さんて意地っ張りですものね。欲しいってあんなに顔に書いてありますのに」

「ぼくもそう思いますのです」

「よく渡せたな圭一。面白かったぞ」

「違いねえーな！あははははははは！」

「ちよつ、こらあー。おじさんの陰口言ってるでしょ！」

魅音が遠くから言ってきた。

「バイト急がねえーとやばいんじゃないの」

「もー！覚えておきなよー！」

圭一がそう言うつと魅音は走り去ってしまった。顔を真っ赤にしなから。

俺は圭一に小声でそう言っちゃった。

「・・・圭一、お前も魅音にどうやってあげようか迷ってたんじゃないの？顔見てたらわかるぞ」

すると圭一は真っ赤になっちゃった。

相変わらず俺はニヤニヤしている。

「どうしたのかな、かな？」

レナが俺と圭一の会話に入ってきた。

「な、なんでもねえーよ！」

そのとき、俺のいたずら心に火がついた。

「そうか？実はな、圭一は――」

「雄斗おー」

圭一が飛び掛ってきた。

「うわっ！」

不意打ちを食らってしまった。圭一は腕で俺の首を腕で絞めてきた。

「ちよっ、ギブギブっ！い、言わないから離せー、死ぬ、死ぬって

！……」

「「「あはははは」「」」

そんな会話がしばらく続いていた。

第七話 ゲーム大会！（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、始めました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの黒狐です。今回も時間関係なしで喋っていききたいと思います。」

ではさっそく、今回のゲストをご紹介します。今回のゲストはこの方だっ！……！」

沙都子「北条沙都子ですわ」

黒狐「今回のゲストは北条沙都子さんですっ！」

沙都子「やっとうたくしの出番ですよ」

黒狐「いつも、ラジオの前にサイコロで決めるから全部運だよ。ネタを考えるのは大変だけどな」

沙都子「そういうことは言わないほうがいいのですわよ」

黒狐「大丈夫大丈夫っ！」

沙都子「それにしましても、今回の話はだいぶ原作よりの話ですわね」

黒狐「ああ、一応行っておくが、ちゃんと原作の日付などを考えながらスケジュール立ててるから、この回はゲーム大会ということになったんだ。まあ、これからが黒狐オリジナルにしようとしている」

沙都子「それならいいですけど、私の出番とかは大丈夫なの？」

黒狐「……ダイジョウブですよ」

沙都子「……」

黒狐「何だ？その手に握ってる紐は」

沙都子「えいつ！」

ガンッ……！

黒狐「ぐふっ……！」

沙都子「トラップですわっ！」

黒狐「これガチの罠だ…！いつの間に用意したんだ」

沙都子「ついさっきですわ」

黒狐「ははは…でも、前に沙都子のトラップの回作っただろ！」

沙都子「それはひぐらしの小説では必ず必要なものですわ」

黒狐「どんなチートキャラでも沙都子のトラップは通用しねーだろ？」

沙都子「当たり前ですわ」

黒狐「ちなみに、さっきの罠で頭が痛いのだが」

沙都子「当たるのがいけないんですわ」

黒狐「最近、俺の役目って酷い気がしてきた。梨花ちゃんのほっぺを二回食べてるんだよ」

沙都子「実は今日も…」

黒狐「ぜってー食べねーぞっ…！！」

沙都子「冗談ですわ。それより、私のコーナーとか考えてますの？」

黒狐「考えてないっ！」

沙都子「威張るんじゃないですよっ…！！」
ガンッ

黒狐「ぐっ…！！」

沙都子「どうです！二回目の罠トラップは！？」

黒狐「いてて…だからいつ仕掛けたんだよっ！」

沙都子「企業秘密ですわ…！！」

黒狐「なんかもう十分沙都子のすごさが伝わった気がするんだけどっ…！！」

沙都子「トラップに関してはわたくしにおまかせですわよっ！」

黒狐「花火トラップとか止めるよ。部屋が引火するから」

沙都子「そのくらいは当たり前でございましてよっ！」

黒狐「沙都子限定のコーナーが浮かんでこないの、募集します」

沙都子「他力本願の極みですの」

黒狐「やって欲しいコーナーとかでも送ってくださいっ…！！」

沙都子「私のコーナーがいつになるかが疑問ですの」

黒狐「浮かんたら部活メンバーの誰かと競演させてやるから今回はトークだけということでっ！！！」

沙都子「しょうがないですわね」

黒狐「ただいま12時を回りました」

沙都子「どこのラジオですのっ！！！」

黒狐「沙都子って圭一並みのつつこみ力があるな」

沙都子「当たり前でしょ」

黒狐「盥が落ちてくるのは嫌だけどな」

沙都子「度が過ぎたら、トラップを発動しますの」

黒狐「圭一より恐ろしいっ！！！」

沙都子「そんなことより、今後の予定とかどうなったんですの？」

黒狐「とりあえず、今はオリジナルを作成中。ツイッターとかでもつぶやいていたけど、サブキャラの名前で悩んでる」

沙都子「ひぐらしは？」

黒狐「ザ・クイズショウの続編も考えてる」

沙都子「また暇ができますの」

黒狐「今度は沙都子を結構出そうかと考え中！」

沙都子「本当ですの！？」

黒狐「未定だけどな」

沙都子「どっちですのっ！！！」

バシユっ！！！

黒狐「うわあああああああ」

沙都子「では、黒狐さんがなぜか網で捕まっていますが、時間も時間ですので、今回はここまでっ！！！」

黒狐「最近扱いが酷い黒狐と」

沙都子「北条沙都子で」

黒狐・沙都子「お送りしましたっ！！！」

黒狐「感想など待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれ

れば嬉しいです。皆様のご協力お願いします。気軽にどうぞっ！ツイッターもやってます」

沙都子「部活メンバーのコーナーも募集してるそうなのでそちらもよろしくですわっ！」

今回の黒狐の心の叫びっ！

黒狐「『ザ・クイズショウ』ひぐらしのなく頃に』が一日で1,156アクセスというビックリするような結果ができました。これからも頑張っていくのでよろしくっ！！！そして、応援ありがとうっ！！！」

沙都子「長過ぎですのっ！」

ポトッ！

黒狐「俺を落とすなーっ！！！！」

ドンッ

黒狐「隣の人から苦情くるな。ははは・・・」

沙都子「ではまた次回ですの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1367x/>

ひぐらしのなく頃に 闇灯し編

2011年11月8日01時09分発行